

2024年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏名
人間健康学部 人間健康学科	准教授	竹田 安宏
最終学歴	学位	専門分野
北海道教育大学大学院	教育学修士	保健体育科教育法

I 教育活動

○理念・目標・方針・計画（方法）

【理念】

校訓である「真面目」を念頭に置き、教育活動を通じて学生に浸透させる。

【目標】

建学の精神である「真に信頼して事を任せうる人格の育成」を基盤に、人間の健康に関わる諸問題、また、昨今の激変する学校現場に求められる教員を一人でも多く養成する。

【方針】

学生が納得感・達成感を得ながら、講義等で取り扱う専門的知識のみならず、教員ないし社会人として必要とされる資質・能力を高めていけるようにする。

【計画（方法）】

教職科目である「保健体育教育法Ⅱ」の講義では、中学校及び高等学校における授業づくりに大きく関わる質の高い「学習指導案」及び「教材・教具」の作成が必須であること。また、指導案作成から模擬授業に発展させ、当活動を起点に保健科教育の指導の在り方や具体的な指導方法について理解を図る。また、「教育実習事前及び事後の指導（中・高）」では、筆者が長年経験してきた高等学校現場の具体例を示しながら教育の進め方や在り方について思考を深めていく。「生徒指導論」においては、生徒指導提要に基づき、基礎的事項を理解し、現代における生徒指導の課題となる様々な事例から解決方法を協働的に探る取り組みをおこなう。「特別活動研究」においては新学習指導要領の内容を踏まえ、演習形式を用いて実際の学級活動の運営方法を学ばせる。「総合演習」では「オンリーワンを一人にひとつ」をコンセプトとして保健体育教員を目指す学生に対応できるように既存の指導プログラムを用いながら、保健体育の基礎的知識の構築を図る。

○担当科目（前期・後期）

（前期）

生徒指導論（中・高）、教育実習事前及び事後の指導（中・高）、スポーツ実技、総合演習Ⅰ、専門演習Ⅰ、教採特講（専門教養（保健体育））

（後期）

保健体育教育法Ⅱ、学校保健、特別活動の指導法（中・高）、スポーツ実技、総合演習Ⅱ、専門演習Ⅱ、教採特講（専門教養（保健体育））

<学外：教育実習Ⅰ（中・高）、教育実習Ⅱ（高等学校）><オムニバス：人間健康学>

○教育方法の実践

担当科目のほとんどが教職関連の科目であることから、少人数での授業形態を生かし学生個々の課題解決に向けた十分な取り組みが可能になるなど良質の授業提供に繋げることができた。

○作成した教科書・教材

「保健体育教育法Ⅱ」の模擬授業において「授業評価チェックシート」を作成。（学習指導要領改

訂に伴い、求められる授業が変わってきているため。)

「生徒指導論」の教材ではケーススタディをいくつか用いて、イメージを喚起させ、場面指導や実践力の育成を図った。

○自己評価

FD アンケートによる評価：前期「教育実習事前及び事後の指導（中・高）」においてすべての項目で4.6以上。「保健体育教育法Ⅱ」においてすべての項目で4.7以上の評価を得た。教職を目指す意欲の高い学生と対話しながら学びを深めることができたと思われる。また、授業時間外において指導案作成のフィードバックを何度も繰り返し、完成度を高めることができた。模擬授業においては「オンリーワンを一人にひとつ」に繋がる個の持ち味を生かす授業展開を促すことができた。

II 研究活動

○研究課題

主体的・対話的で深い学びに結び付く保健授業の構築

○目標・計画

【目標】

当研究は今日求められている「主体的・対話的で深い学びに結び付く保健授業」の今後のあり方を様々な事例から検討していくことを目標とする。

【計画】

2023年度までに実施された高等学校における保健授業の実践記録から量的・質的分析をし、効果的な側面を提示していく。対象となる授業テーマは「高齢者のための地域包括ケアシステムの考案」で、単元の目標は「これからの社会における高齢者のための社会づくりに参画できる力を養うこと」である。全8時間の授業の中で知識・理解、思考・判断・表現力、主体的に取り組む態度を観点別評価に位置付け、グループ学習による探求的な取り組みを位置づけ発表まで行った。データは、公立校等学校男女約120名（40人単位で3クラスの授業）に対し、毎授業後に行った形成的評価と最終授業時の総括的評価を調査したものである。特に単元のまとまりで授業者の狙いとする資質・能力の育成が図られたかを量的データと質的データから分析する。

○2017年4月から2025年3月の研究業績（特許等を含む）

（学術論文）

- ・竹田安宏（2024）生徒指導論の授業分析と考察～学生自身の学びの評価と授業者に対する評価～、東邦学誌第53巻第2号、43-53
- ・竹田安宏（2024）主体的・対話的で深い学びの実現に向けた保健授業～「高齢者のための社会的取り組み」の授業から表出された学びの姿、北海道高等学校教育研究会研究紀要、第61号、31-36
- ・竹田安宏（2023）「新型コロナウイルス（COVID-19）による休校期間と学校再開後の健康状態の変化～保健授業単元『生活習慣』のあり方を探る～」北海道高等学校教育研究会 研究紀要第60号、39-44
- ・竹田安宏・関朋宏（2023）高校部活動におけるレジリエンスの特徴～高校1年生の運動部と文化部及び未加入の比較～（査読付）日本高校教育学会年報、第30号、16-25
- ・竹田安宏（2020）習得・活用・探究を意識した単元「生活習慣」の保健授業づくり（査読付）保健科教育研究、vol.5、32-41
- ・宮崎俊彦・田中昭憲・竹田安宏（2020）中学生女子および高校生女子における室内50mスプリント走の特徴：加速区間、中間疾走区間に着目して（査読付）、北海道体育学研究、第55巻、53-

- ・竹田安宏・宮崎俊彦・田中昭憲（2019）「高校短距離選手への科学データフィードバックの実践～課題発見・解決とモチベーションの向上を目的として～」（査読付）北海道体育学研究、第54巻、91-100

（学会発表）

- ・竹田安宏（2024）探究学習を位置付けた高校保健授業の開発実践、日本保健課教育学会 第9回大会併発表
- ・竹田安宏（2024）「生徒指導論の授業評価～実務家教員の役割～」日本高校教育学会北海道支部会発表
- ・竹田安宏（2022）「高校部活動におけるレジリエンスの特徴～高校1年生の運動部と文化部及び未加入の比較～」令和4年度北海道体育学会発表
- ・竹田安宏（2021）「高校体育男女共習授業の特徴と男女の意識差～バレーボール授業のアンケート調査から～」令和3年度北海道体育学会発表
- ・竹田安宏（2019）「生活習慣を単元とした『習得・活用・探究』の授業実践」日本保健科教育学会第4回研究大会発表

（その他）

- ・森浩之・竹田安宏・他6名（2020）編著「運動部活動顧問のための安全対策マニュアル(改訂版)」北海道高等学校体育連盟
- ・竹田安宏（2017）実践研究報告「学びを生かす多角的アプローチ」～札幌南高校陸上競技部の取り組み～、高体連ジャーナル vol.33

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

特になし

○所属学会

北海道体育学会、日本スプリント学会、日本コーチング学会、日本体育科教育学会
日本体育・スポーツ・健康学会、日本保健科教育学会、日本部活動学会、日本高校教育学会

○自己評価

計画にある「高等学校における保健授業の実践記録から量的・質的分析をし、効果的な側面を提示していく。」取り組みについて、日本保健科教育学会で発表し、そこで得た知見をもとに学会誌へ投稿することができた。今後も発展できる課題を得ることができた。

Ⅲ 大学運営

○目標・計画

【目標】

所属する委員会（人間健康学部部会・教職支援センター運営委員会・入試委員会）において、概要を理解し、現在課題となっていることに尽力していく。特に教職に関しては、学生の実態を委員会で伝え、課題解決が進むよう個に応じた支援に結び付けていく。

【計画】

所属する委員会が円滑に運営できるように協力していく。教育実習先訪問者を配置し、訪問先と大学側の連携が図れるように準備する。実習後、教員採用試験後について次年度に生かすべき課題を整理し書類として残す。特に、自身の高等学校での受け入れ経験から大学に求めることなどが反映されているかに留意していく。

○学内委員等

教職支援センター運営委員会、人間健康学部部会、入試委員会

○自己評価

各委員の一員として、役割を果たすことができた。

IV 社会貢献

○目標・計画

【目標】

地域創造研究所に所属し、共同研究者として地域社会の発展に寄与する。

地域と関わる機会を積極的につくり、今後の課題を発見する。

【計画】

小学生陸上教室の開催し、子どもの運動能力向上に寄与する。

札幌 YMCA ウェルネス委員としてボランティア活動推進の助言を行う。

○学会活動等

日本保健科教育学会で発表、日本高校教育学会北海道支部会で発表できた。

○地域連携・社会貢献等

小学生陸上教室は開催できなかった。札幌 YMCA ウェルネス委員としては、子どもたちの現状に応じたプログラムの開発について助言した。

○自己評価

愛知県スポーツ協会の研修会に参加し、コーチングスキルを高めるとともに地域の実情について情報を得たことを今後に活かして生きたい。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

学校現場との連携を密にし、授業参観に出向き、今後の協力を依頼していく。

北海道から本学へ受験者が増えるよう高等学校教諭に対し、広報的な活動をしていく。

VI 総括

大学で初めての勤務のため、第一に授業を重視し、実務家教員として自身の経験を生かしながら学生の学びを支援できたと思われる。学会発表、論文作成とも年度当初の計画通り進めることができた。

以 上